

書 評・紹 介

岡田實・大淵寛編

『マルサス人口論の200年』(シリーズ・人口学研究9)

大明堂・1998年・A 5判・viii+268 P

マルサスの『人口論』初版が出版されて200年になる。それを記念して一冊の研究書を出版しようというのであるから当然のことだが、編者はマルサスの人口論を高く評価し「マルサスは経済学者として人口学者として生き続けており、単なる歴史上の人物にとどまっははいない」という。本書の論議は、目次に明らかなように多側面にわたっている。

- 第1章 人口学としてのマルサス (大淵寛)
- 第2章 経済学におけるマルサス (原田理恵)
- 第3章 社会学におけるマルサス (岩澤美帆)
- 第4章 生物学におけるマルサス (佐藤龍三郎)
- 第5章 先進国の人口に対する妨げ (阿藤誠)
- 第6章 開発途上国の人口に対する妨げ (西川由比子)
- 第7章 マルサスと現代人口思想 (岡田實)
- 第8章 マルサスと現代人口政策 (石南国)
- 第9章 マルサスと現代デモグラフィ (河野稠果)
- 第10章 マルサスの数理モデル (和田光平)
- 第11章 21世紀のマルサス人口論 (岡崎陽一)

関係文献目録 (原田理恵・大淵寛)

1798年に匿名で出された『人口論』は、フランス革命によって高まった空想的社会主義の楽観論に対する冷静な批判の書であった。批判の武器としたのが「人口の原理」であり、マルサスは悲観論に傾かざるを得なかった。人口問題をめぐる悲観論と楽観論の人口論争は、マルサスの没後も続いた。その経緯は、本書の第2章、第3章、第7章などで解説されている。

第5章では、先進国の人口にマルサスの人口・経済モデルが当てはまるか否か、その有効性と限界を考察している。第6章では開発途上国の人口変動と人口政策を検討している。第11章は「マルサス人口論が21世紀にどのように評価されるかという問いに答えること」を課題としている。マルサスの時代以降、人間社会の変化は著しいものであったが、マルサスの人口論は危機的な状況に直面するたびに思い起こされてきた。20世紀が終わろうとしている現在、政治・経済・社会の諸方面で難しい問題が山積している。

評者の個人的な関心による面も強いが、マルサスの『人口論』は、人口の原理が人類の幸福に及ぼす影響を論じたものであった。とくに第2版以降では、多くの頁を救貧法の検討に当てている。このような「人類の幸福」に関する政策論について、もっと論じてほしかった。また、ジェンダー革命により女性が手に入れたリプロダクティブ・ヘルス・ライツは、これからの人口問題にどうかかわってゆくのであろうか。興味つきない問題が多い。

マルサスの論述は多岐にわたり多少とも曖昧な面もあるが、マルサスの人口論に関係してこれだけ多側面の学術的な論述がなされたことに驚く。
(兼清弘之/明治大学)